宮城民医連
東日本大震災

災害復興ニュース

ニュース =第107号=
発行日 2012年4月23日
発行 宮城民医連

漁業の再建に向け頑張っている人たちがいる　女川町野々浜

石森あき子さん（野々浜地区区長の奥さん）

東北電力女川原発の建物を撮影した帰り、コンテナで牡蠣の養殖準備をしているお母さんたちをみかけ立ち寄った。種ガキのついたホタテ貝をロープで結ぶ作業をしていた。これを海中に吊るして成長を待ち、10 月以降、冬にかけて出荷すると言う。

女川町野々浜に住んでいたみなさんは、津波で住宅が跡形も無く流され、その跡地の上で、ボランティア団体から寄贈されたコンテナで作業をしていた。みなさんとても明るく名前や年齢を聞くと、「吉永小百合、私は山本富士子。年齢は 37 歳」との返事。私は「栗原小巻さんかと思った。」と楽しい会話が弾む。

仮設住宅から通っている（全員）石森あき子さん（62）は、「秋になったら美味しい牡蠣をご馳走するから遊びにおいで」と言ってくれた。写真が欲しいというので、来週（4/28）健康相談会でまた女川来るので、写真を届ける約束をした。名刺を渡すと名前が息子さんと一緒とのこと。

津波で全てを失い、大変な状況におかれているのにもかかわらず、笑顔で再建に向け頑張っている人たちがいる。東北から仮設住宅がなくなるその日まで、私たちは被災地を支援し、見守っていく必要がある。（神馬）

コンテナの中はかなりひんやりとしていた。みなさん厚着で作業していた。健康には気をつけて。
（女川町野々浜の海岸近くで）

阿部正二さんと孫のはがかえでちゃん（女川町塚浜で）

女川原発近くの漁港には高い木の上に今も漁具が

女川町塚浜の小さな漁港からは、東北電力女川原発の建物が一望できる。

漁港の防波堤に立つと、女川原発が津波で大惨事にならなかったのが不思議なくらい海岸の近くに位置していた。

塚浜に住んでいる阿部正二さん（64）は、孫のはがかえでちゃん（2）と海岸に遊びに来ていた。地震の時、自宅は高台にあったため津波の被害は免れたが、津波は電線の上まできたという。今も漁具が高い木の上にぶら下がっていて、津波の大きさを伺い知ることができる。かえでちゃんの父親は震災の時、仕事で八戸にいたが家族の安否など、連絡が取れず心労でなくなったと話してくれた。津波で家が全て流され、今は母子で石巻の仮設住宅で暮らしている。

阿部さんは、小さい頃のチリ地震の津波のことを覚えていて、引き波で港から数十メートル先まで海底がみえていたと津波の恐ろしさを話してくれた。また、若いころは遠洋漁業の船に乗っていたが、父が漁船を購入し、沿岸の漁をするようになった。その頃、坂総合病院で腕の手術をして、大変お世話になったと話してくれた。